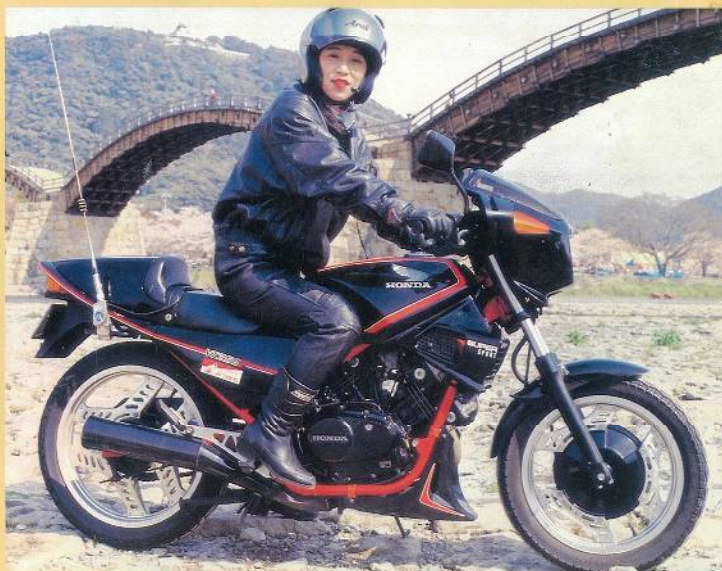


本日モ 晴天ナリ!

JARL 中国地方 40年のあゆみ

— 温 故 知 新 —



社団法人日本アマチュア無線連盟

中国地方本部 記念誌発行委員会

“JARL 中国地方40年の歩み”『温故知新』

平成5年3月31日

発行 JARL中国地方40年の歩み発行委員会

代表者 井原達郎

編集委員 JA4AO 井原達郎、JA4FB 佐々木正義、JA4FP 津森国夫
JA4LP 直良 潔、JA4RE 武鏈久治、JA4SJ 明木 靖
JH4UWD 中島俊治

事務局 JARL 中国地方事務局

広島市中区銀山町2-6 松本無線ビル5F ☎ 082-243-1390

※ 本誌掲載写真の一部に“CQ誌”から転載したものがありますがこれは
CQ出版社のご厚意によるものです。

印刷製本 (有)日良居タイムス社

山口県大島郡橋町日前

☎ 08207-3-0649

アマチュア無線による 島根県での非常無線通信の歴史

島根県のアマチュア無線の歴史を振り返る中で非常通信はどうしても書き残しておきたいことのひとつであると思う。

元来、非常通信は電波法にも目的外通信として、また同運用規則の中でも非常の場合の無線通信として定められている。

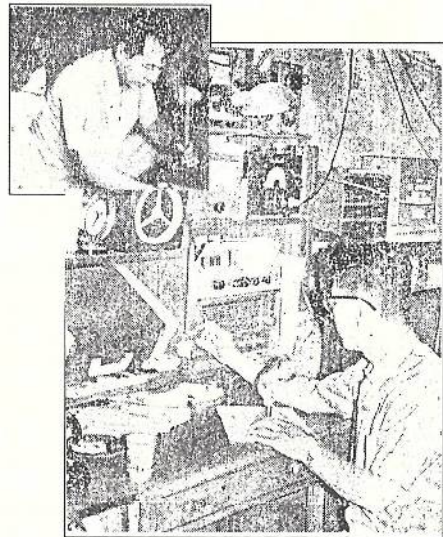
現在のように防災無線や各団体の通信設備が整備される以前、県内の防災関係の無線はきわめて弱体であった。その中でのアマチュア無線の通信網は非常災害時にはきわめて有効な通信の手段であった。しかし非常通信を実施するのは平素の組織の上にたった周到な訓練の積み重ねが必要条件であるように思われる。いままで県下で実際に行われた災害時の非常通信のうち主なもののうちから紹介して当時をふり返ってみた。この項を書くには、県内各地クラブからのレポート、サンケイ新聞、山陰中央新報を参考資料とし、日本赤十字社島根県支部百年史から一部抜粋させて戴いた。

非常通信の始まり 39年災害（サンケイ新聞より）

《39年災害》

七月のはじめより断続的に降ったりやんだりしていた梅雨も、十六日昼前から集中豪雨となり、十七日には山陰地方は各地で大災害が続出した。

自宅にいた多々納（JA4KS）は直良（JA4LP）から各地に被害が続出、非常通信を発動すべき状態にあることを知らされた。当時アマチュア無線に認識のなかった出雲市は、南部地区が電気、水道も止まり道路も寸断され、駐在所の警官が腰までの泥水の中必死に第一報をもたらし、また地区住民への激励文を空中投下しなければ



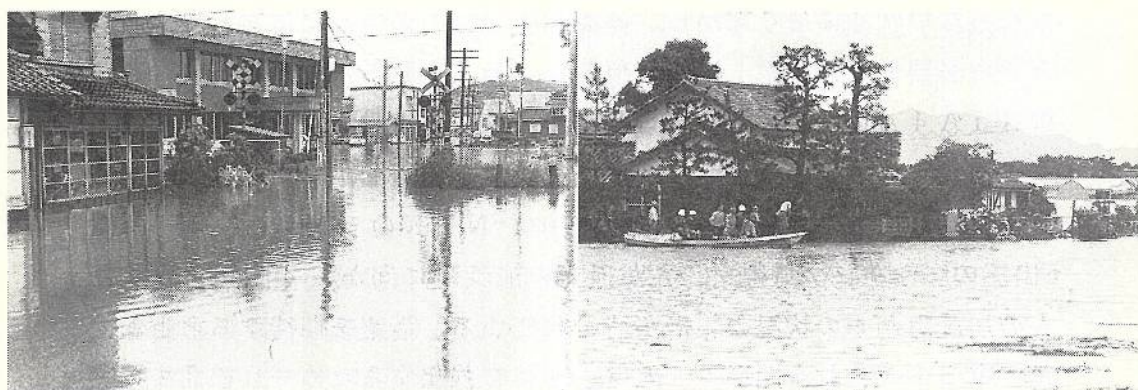
ばならない状態にありながら、多々納等の協力の申し出に対して「今のところ必要ありません」との返事した。二人は直ちにその足で市内の山根（J A 4 A Q I）に基地局を開設するように依頼し水没孤立の加茂町へと向かった、しかし道路は各地で寸断され各方面からの進入路もすべて通れず、あきらめ引き返す相談中に、NHKのラジオのニュースは「出雲のアマチュア無線家二人が孤立の加茂町に向かって出発した、二人の加茂町からの状況の報告が待たれている、活躍を期待する」と報じた。車の中でそれを聞いた二人は、態勢を強化するため一旦松江まで引き返し、長岡（J A 4 F C）等と相談、岡本（J A 4 F N）を加えた。一方、夕刻日赤の救護班が大東から徒歩で加茂町に入ったとの情報を得、三人は徒歩を覚悟で出発したが夏の日ももう暮れていた。しかし道路は荒れていて三人の行動は困難を極めた。

被災地の中心・大原郡加茂町へ約10キロ無線機、電源装置を背負って乗り込んだときはすでに午前三時を回っていた。ただちに加茂小学校の片隅に無線局を開設、3.5メガヘルツで基地局をコールした、しかし電波が出たのは東の空がほんのり白みかかった午前四時を過ぎていた。もうだれも聞いていないのか。

現地からの呼びかけを最初に傍受したのは当時開局したばかりの出雲市の新宮（J A 4 C F B）であった。彼はコンタクトをとると急いで近くの公衆電話ボックスまで走った。基地局の山根に知らせるためである。かくして仮設ながら有線が回復するまでの二日間不眠不休で県と被災地との通信連絡に当たった。このときの経験が、直良に組織だったアマ無線奉仕団の結成を思い立たせた。

《47年災害》（日本赤十字社島根県支部百年誌ほかより）

中国太郎の異名を持つ江の川の水かさが増し、危険水位に達した七月十一日深夜、島根県アマチュア無線赤十字奉仕団事務局長の矢野強（J A 4 K U H）は、眠れぬ夜を過ごしていた。窓の外はバケツをひっくり返したようなどしゃ降り。二ヶ月の非常通信災害救助訓練の様子が脳裏をよぎっていた。



昭和47年のこの日、島根県地方は数日前からドッカーリと居座った梅雨前線の影響をまともに受け、各河川は軒並増水、主な河川では濁流がごう音とともに堤防を一瞬のうちに破壊し、キバを向けて襲いかかった。死者行方不明二十七人を出し、県下五十九市町村のうち実に二十一市町村に災害救助法が発令された「47.7」豪雨災害である。そのとき出雲部のアマ無線家二十人で組織した無線奉仕団の活躍にはめざましいものがあった。

「被害甚大で通信の途絶えた桜江町へ日赤救護班を派遣するので、同行し協力ください」……。県知事より出動要請を受けたのは十三日。さっそく副委員長直良（JA4LP）をチーフに黒田（JA4OMJ）そして矢野（JA4KUH）の三人が現地入りすることになった。

まず、直良の自宅に無線中継基地を開局、和田守（JA4MV）をチーフとした。3.5メガヘルツの短波無線機一式を携えた三人は、翌十四日午前、出雲市役所前で日赤救護班と合流、ハム仲間の道路情報（後述の佐々木JA4KBY外）をもとにルート選択。それでもズタズタに寸断された主要幹線を避けながらの通行は困難を極めた。夕やみ迫るころ、一行は壊滅的な打撃をこうむった現地にたどり着く。休む間もなく避難場所の公民館の一角に現地局を設けさっそく連絡を開始した。行政無線の整備が立ち遅れていた当時、非常時の通信手段は警察無線しかなかった。このため、各現地対策本部からの通信はふくそうし、現地をいらだたせた。出雲の中継局を経由するにせよ、ダイレクトに状況を伝えるアマ無線は、現地対策本部だけでなく、住民たちを勇気づけさせた。実は

現地からの発信は東京・日赤本社でも傍受されていた。より遠くまで飛ぶ短波ならでのことだが、これによって本社からの救援物資・医薬品輸送は大幅に短縮。県支部が協力要請する頃には、すでに発送準備に入っていたという状況だった。関係者は改めて無線奉仕団の重要性を認めることになる。翌十五日、藤江（JA4SHX）等の増強を受け、孤立した川戸、川越地区でも活躍、急患輸送の依頼など、取り扱った送信電報は三百五十件を数えた。無線機は勿論のこと、時には車両さえ提供しなければならなかった。52年の隠岐災害、58豪雨災害でもマイクを手にする彼らの姿があった。無線奉仕団が活躍している時を同じく、江津地方でも、多くのアマチュア無線局の活躍があった。七月十一日それまで満水の状態になっていた江の川が午前六時頃から氾濫し始め、八時頃から比較的低地の松川地区川平地区の方



から浸水し、両地区の約60パーセントがあっという間に床の上まで浸水した。翌十二日それまで市民が情報を知る唯一の頼みであった市内有線放送も午前九時の放送を最後に水害状況の連絡も途絶え、また、道路も各所でがけ崩れが発生、比較的高所にある川平郵便局も午後2時には水没、市内・市外とも電話回線は途絶し、完全に孤立状態となり市民は恐怖におののいた。江津市の平田に住む佐々木正道（JA4KBY）と息子の俊行（JA4NFM）は、自分の家が一階の天井まで水没したにもかかわらず、自家用車で同市市村松川橋東ずめまで避難し車の中から江津市都野津の国沢（JA4AA）、市の災害対策本部へ展開中の**（JA4DQJ）に向け非常通信の電波を十二日午後七時まで発信し続け、その電報内容も電電公社回線による非常通信の早期確保、衛生医薬品等の急送、食料援助、診療所の被害と医師の派遣等の要請、傷病者の輸送、資材人員の輸送上の連絡など多岐にわたった。

また平田市役所勤務の河原（JA4RQJ）は、桜江町の隣、邑智町の落合（JA4IFU）から発信される邑智町関係の被害状況の非常通信を受信、百三十三時間にわたってこれを県災害対策本部へ送った。

《58年災害》

七月二十二日夜から翌二十三日未明にかけ、島根県西部を襲った梅雨末期の集中豪雨は、時間雨量90ミリというケタはずれの数字を記録。空前の水魔は山を崩して道路、堤防を破壊、一瞬のうちに家をのみ込み、町全体を流木と濁流の海に化した。死者、行方不明者百十二人を出した「58.7月豪雨」である。被害情報がふくそう、混乱状態にある中で日赤はまず給食確保のため、益田赤十字病院に向けて食料品の海上輸送を決定、日赤職員三島（JH4EDI）と、アマ無線奉仕団の藤江貞生（JA4SHX）の二人が、知事の要請を受けて出動した境港の海上保安部巡視船「あわじ」に乗船、米六百九十キロ、缶詰類、バナナなど大浜漁港経由で現地へ送り込んだ。その後、アマ無線奉仕団は車五台に便乗陸路国道54号を南下、中国縦断道を利用し六日市より益田へ大迂回をし現地に入った。

一方、一晩で恐怖の降雨量646ミリを記録した県西部三隅町では町内の有線回線が途絶し道路も寸断され豪雨大災害となった。あちこちの山が崩れ、死者が続出、非常事態宣言が発せられ、地区内は壊滅状態となった。



その中で自宅の被害も省みず大森義明（JA4CJ）は三隅アマチュア無線クラブ（JH4YRG）とともに3.5MHz、4,630MHz、144MHzの各バンドで死亡者搬出、孤立者救出、救急患者輸送に関すること、孤立地域への救援物資の輸送、消防団の出動要請等電報も多く、自家用の3キロワットのディーゼル発電機を十日間も回し続ける非常通信を実施した。

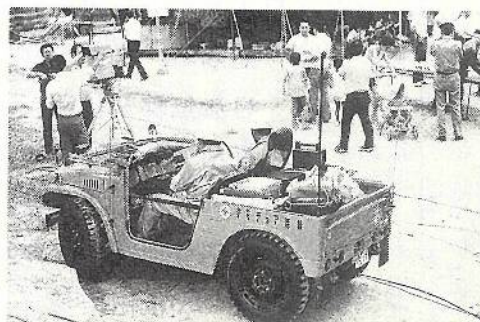
(浜田地区は詳細不明につき記載できず)

《63年災害》(H R C だより)より

『七月十五日豪雨災害にH R C (J A 4 Y O J) 非常通信を運用し活躍』として、その模様を次のように伝えている。

七月十五日、午前一時ごろより降り出した雨が、午前二時にはひどくなり、寝つくことが出来ず、テレビのスイッチをいれてみると、すでに島根県の東西部に大雨注意報が発令されていた。雨音を気にしながらテレビのレーダー雨雲の様子を眺め、浜田消防の市内パトロールの情報を聞いていると、午前三時頃より市内の各箇所ですぐ水があふれ、浸水家屋が始め、山崩れで倒壊家屋が発生、家族が生き埋め、被害が拡大中なのがある、雨音がなかなか衰えないのにイライラしながら、時々外に出て側溝を流れる水を監視していると、午前六時頃から側溝がいっぱいになり、道路を泥水が流れ出し、見る見るうちに玄関前に逆流、五十八年の悪夢の再来かと、腹を据えた。しかし午前七時には水位が引き一安心した。

午前八時三十分、市の対策本部より、H R C に非常無線通信運用の依頼があり、大久保 (J A 4 B R G)、藤田 (J R 4 W R D) が対策本部に移動開局した。浜崎 (J H 4 J O R) は自宅より中継運用、大畑 (J E 4 I S H) は、バイクで情報収集に走った。武田 (J A 4 U D R) は自動車で、ヘリコプターがポートを変える度に、東に西に、救援物資の搬送、東 (J E 4 B F N) も、東公園に移動、パイロットとの連絡を受持った。一方孤立状態の三隅町では、神田 (J F 4 J F B) 金岡 (J G 4 I S N) 峠山 (J G 4 I S U) 等が泥土に足を取られながら災害現場や患者輸送に情報を一日中本部に送り続けた。栗原 (J F 4 T Y U) もヘリでさえ救出困難な長見地区での負傷者を、陸路での救出ルートを見いだし搬出、無事救急車に中継等、各所でアマチュア局が活躍し、貴重な情報を本部に通報した。



【島根県の非常無線通信の記録】

39年7月山陰豪雨 加茂町水没

JARL出雲地区クラブ 非常通信実施

7月18日 出雲ハムクラブ 7月の非常通信の功績のため

中国非常無線通信協議会より表彰を受ける

また、知事よりも表彰を受ける

47年7月11日 江津市水没

江津市 佐々木 非常通信実施

7月11日～石見地方水害 日赤無線奉仕団 非常通信実施

知事より感謝状

7月豪雨 出雲アマチュア無線クラブ 非常通信実施

知事より感謝状

7月豪雨 出雲アマチュア無線クラブ 非常通信実施

中国非常無線通信協議会より感謝状

7月豪雨 出雲アマチュア無線クラブ 平田市長より感謝状

7月豪雨 出雲アマチュア無線クラブ 出雲市長より感謝状

49年9月26日出雲アマチュア無線クラブ 非常通信、災害救助

日本顕彰会より表彰

50年7月12日から14日 大田市、仁摩町水害

日赤無線奉仕団

非常通信実施

日本赤十字社より感謝状

52年8月6日より 隠岐知夫村水害

日赤無線奉仕団

非常通信実施

58年7月23日より 島根県西部災害

三隅町 大森

非常通信実施

日赤無線奉仕団

非常通信実施

浜田アマチュア無線クラブ

非常通信実施

63年7月16日 浜田市水害

浜田アマチュア無線クラブ

非常通信実施

浜田市長より感謝状